

『祈りにもとづく使徒的共同体とは』

ワークショップランチ会

1 昼食と懇談

第5回には主催者の予想以上の約120名の方々にご出席頂きました。

始まりの歌「マラナタ」に続き、13のテーブルに分かれて食事と懇談をお楽しみ頂きました。

第1回ワークショップにおいて、もし自分が主任司祭なら大きな食堂を造って皆で食事をしたかったと声が出ていました。

共に食事を楽しむことも共同体作りと言えることから、今回の企画となったものです。

各テーブルとも大いに盛り上がり、新たな繋がりが作りに役立ったことでしょう。

2 「共同体を生きる

あなたに」

英主任司祭

英主任司祭からは、聖書における共同体についてお話頂きました。概要は次の通りです。

●ヨハネによる福音書21章1～14節「イエス、7人の弟子に現れる」

ここでは、7人の弟子が夜通し漁をして何も獲れなかったにもかかわらず、復活したイエスの言う通りにするとたくさん魚が獲れ

たという共同体体験が描かれる。

共同体のメンバーが共同体験をすることが決定的に大事である。救いの体験を現代社会は個人的に考えず

ざるが、大切なのは共同体としての体験である。満たされた日本では共同体体験をしにくい。ワールドユースデーで海外へ行くと、食事が無い、寝る所がないといった次々に起きる試練を

一致団結して受けとめる。苦しい共同体験こそ心に残り、一緒に過ごす時間が長いほど、共同体験の回数が多いほど、共同体は親密になる。

様々な障害を乗り越えた後のイエス様との食事が共同体の醍醐味である。

●使徒言行録2章42～47節「信者の生活」

「信者の生活」

ここでは、聖霊降臨とペトロの話の後に多くの人が洗礼を受けた初代教会の共同体生活が描かれた、教会刷新のキーとなる箇所である。聖霊に導かれた教会の理想的な姿である。共同体が聖霊に満たされ生き生き

していたので、多くの人が加わりたいと願った共同体がそのまま福音宣教に繋がった。小さく閉じた中で自分たちだけ仲良くして、外から入れない教会ではな

く、喜びや救いの恵みに溢れているから皆そこに入りたくなる共同体というのが理想である。

阪神大震災の頃の、鷹取教会 神田神父の話だが、人間の心の壁が崩れて真心が現れ、それぞれ持っているものを分かち合い助け合った。その時そこに神の国

があると感じたという。苦しみと喜びが一緒に来るある種の限界状況で、神の恵みを感じるからこそ特別に人間のつながりが強まるの

だろう。

初代教会では、使徒の教え、相互の交わり、パンを割く、祈る、の4つを大事にしていた。教えを学んで

宣べ伝えることは大事である。相互の交わりは分かち合いであり、食事を共にすること、困っている人と助け合うことなどがある。パンを割くとは主日ミサに与ること。祈るとはミサ以外で祈ることである。

この教会では、ミサ以外にも祈る機会が多いが、イエズスのソーサ総長がおっしゃった通り霊操に力を入れなければならない。

●コリントの教会への手紙12章12～27節「一つの体、多くの部分」

キリストの体は「聖体と教会の2つの意味を持つ。

初代教会は「聖体を神秘的な体、教会を実体的な体と捉えた。弱体化した中世の教会は、教会を神秘的な体としたが、これには無理があった。

初代教会に戻り、「聖体は神秘として受け取り、教会が本当のキリストの体かどうか、絶えず問い掛けていくべきである。

3 「福音を伝える」

「ヒント集」の発行

昨年度行われた「福音を伝えるワークショップ」の内容を整理し、ワークブックとなる部分を加筆して、黙想、振り返り、実践に役立つ形にしたものです。

この冊子の利用により、信徒一人ひとりが「福音を伝える者」になることを目指します。

ご希望の方は事務室でお受け取り下さい。お気持ちのある方には、金額自由の献金をお願いいたします。

4 「代父母の会」の発足

第4回ワークショップから生まれた新たな共同体「代父母の会」について紹介がありました。趣旨としては、①新受洗者の孤立を防ぐ、②代父母とは何かを学び合う、③代父母として

の問題を分かち合う、④代父母と新受洗者、代父母同士、新受洗者同士の交流を深める、の4点あり、これら企画、実施の際のスタッフ募集が行われました。

定例会は毎月第2土曜日開催される予定です。

※次回のお知らせ

2月23日(日)午後1～3時、ヨセフホール『祈りにもとづく使徒的共同体とは』

一人ひとりがキリストの体

お話し 英隆一朗主任司祭

「聖書における共同体」(仮

詳細は、チラシ、ポスター、教会報マシスを参照下さい。

ミッション2030 共同体を生きるグループ

*茶話会形式で行います。